

東京都教職員互助会教育研究グループ「研究結果」報告
【令和4年度研究テーマ】

「個別最適な学びと協働的な学びを実現する社会科指導の工夫」

1 実践報告

(1) 外部連携を図った実践事例

府中市立府中第八中学校 宮川直美先生の実践から

「地域連携を図ったSDGsを視野に入れた地理的分野の授業の工夫」

(1) 授業内容：SDGs講演会

①第1回「環境都市・北九州市の誕生～公害の克服～」

- ・日本の諸地域「九州地方」と関連づけて「北九州工業地帯」について知る。
- ・工業の発展と公害について

②第2回：「環境市民・府中市民としてできること」

- ・府中市の環境への取組みを知り、「環境未来都市」として自分たちができることを市長に提案する。

★北九州市のSDGsへの取組み

60年代からの公害を克服するために、現在、エコタウン事業、環境首都検定 グローバル500の受賞等、市民の運動が重要、企業と一体となって取り組んだ

(2) 地域連携

- ・北九州市環境ミュージアムの館長、コーディネーターの方と第1回、第2回の授業を行う。
 - ・各教室をZoomでつなぎ、オンライン対面授業（アクセスしやすかった）
 - ・外部とつながる準備としては、コーディネーターと2回オンラインにて打ち合わせ
- <外部連携の工夫>
- ・こちらからワークシートを送り、メールでやり取り、
 - ・管理職には、実施可能かどうかわかったあと。相談、実施計画、職員連絡会へ
 - ・環境ミュージアムHPに「ドコエコ」のページがあり、参考にした。
 - ・カリキュラムマネジメントとして、社会科で九州地方をやり、講演会の2回は、総合で授業した。

<各校のSDGsに関わる授業の工夫>

- ・タカラトミー：「みんなのでつくるSDGs人生ゲーム」
- ・ファミリーマート：「ファミマ学園」
- ・明治：「カカオ・チョコレート教室」アフリカ州
- ・各企業のHP上に、SDGsの取組みや、教育推進課があることが多い
- ・富山県でイタイイタイ病あり、出身県にとってSDGsの取組みを知ることはとても大切ではないか。

(2) タブレット端末の活用

町田市立鶴川中学校 高橋拓史先生の授業の実践から

①第2学年：地理的分野、「日本の地域的特色」

「日本の産業を元気にプロジェクト」という授業タイトルで、日本の産業の「よさ」を生かしたり、「課題」を解決したりして、日本の産業が持続的に発展できるためのアイデアを考え、Google スライドを用いてプレゼンテーションを行う。

②第3学年：公民的分野、私たちと経済

「鶴中3年生が選ぶ、ESG経営 No.1 企業はどこだ」という授業タイトルで、候補として挙げられている企業を調べ、E (Environment: 環境)、S (Social: 社会)、G (Governance: 企業統治) に配慮している企業に投資する(仮想)。また、どこの企業にいくら投資するか、その投資を決めた理由は何かについて考え、Google スライドを用いて発表する。「日本の産業を盛んにさせる」「ESD投資を考えさせる」についての調べ学習

<協議から>

・学習課題に対して協働的な学習を設定した授業づくりをした際に、「学習課題について個人で考えたい」という生徒や「個人で作業することで力を発揮できる」という生徒がいる場合、個別最適な学びという観点から、グループでの協働的な学習(話し合い、調べ学習、作業、発表など)を強制することは本当に適切なのだろうか。

・授業規律とのバランスを取りながら、仲間と話し合いたければ話し合い、個人で作業したければ作業しても良いといった柔軟な授業づくり(学びの場づくり)もありなのではないか。

・考えを共有するにしても、GIGA 端末の普及により、ペアや4人、学級内という枠を超え、他クラスや他学年、他校の考えにも触れることができるようになってきた中で、指定した班での協働的な学習に固執する必要はないようにも感じている。どうしたらよいか。

・協働的な学びの工夫点

→「ただ話し合っただけではなく、振り返り場面は1時間の中で1回はあるのが良いのではないか。

→「ありかなしか?」だけを問うだけでなく、生徒の思考が「行ったり来たり」しながら授業を作っていくのが良いのではないか。

(3) 分野のまとめとして歴史学習の意義を生徒に考えさせる

町田市立南大谷中学校 宮川泰之先生「『歴史家体験』プレゼンテーション」から

①3年間の社会科授業の目標を入学時に示す

②歴史学習の最後に、各時代の特色をグループで分担し、時代の大観を行う。調べ学習から、1人4枚程度のスライド作成、発表。計9時間構成

③最後に、「なぜ私たちは歴史を学ぶのか」という問いについて、自分なりに考えさせる。「歴史PRポスター」の作成。

<学習のねらい> (一部)

・「なぜ私たちは歴史を学ぶのか」という問いを考えることを通じて、主体的に歴史学習に取り組み、今後も学び続けようとする意欲や態度を養う。

・各時代の政治、経済・産業、文化などの特色について、諸資料を踏まえて、他の時代との共通点や相違点に着目しながら多面的・多角的に考察し、水から尾言葉で表現する力を身に付ける。また、プレゼンテーションで他者や歴史との対話を積み重ね、過去を顧みて現在や将来の課題、今後の展望を考えることを通じて、新たな歴史をつくり出すための「創

造性」を養う。

<生徒の振り返りから> (一部抜粋)

- ・今までの出来事や人物の行動を学び、そこから自分たちはどう生きれば良いのかを学ぶために、私たちは歴史を学んでいると思う。
- ・悲劇を未来でも起こさないために、学ぶだけでなく、「発信」をしていくことが一番大切だと思った。
- ・歴史を学ぶ意図を追究し自ら考えることができた今は、今後も主体的に歴史を学び日ごろから考えていこうと思う。

2 先進的な実践事例

中野区立明和中学校 長井利光先生 公民的分野:基本的人権「北朝鮮による拉致問題」

- ①基本的人権全 11 時間のうち、「自らの人権を守るためにから「人権侵害のない世界」までの 4 時間を内容のまとまりとする。
- ②第 4 時で拉致問題を扱う。本時の問いは、「北朝鮮による拉致問題に、私たちができることは何か」。
- ③人権教育推進校として、公民的分野「基本的人権」の単元で拉致問題を扱う。また、拉致問題をいかに醜いものであるかを実感させ、偏見や差別をなくす意欲や態度を育む。
- ④授業者が、事前に拉致現場の視察と研修会に参加。帰国拉致被害者に事前にとった生徒からの質問等を届け、メッセージをもらっている。

<協議>

- ・拉致問題を扱うには、カリキュラムデザインをしていくことが必要でないか。
 - ・生徒自身が身近と感じられるかどうか
 - ・道徳でも扱う事例がある。人権教育として、どの教科でどのように入れ込んでいくか。何を目指しているかを授業者がもってといけない。
 - ・当事者の生の声を生徒に返すのはとても良い。
- ⇒生の声を伝えるには、授業者の立ち位置、知識がしっかりしていないとできない。ファシリテーターであるが、自分の考え、思いを伝えたいというのがないと、社会科ではないのではないかと。そうでないと、一面的な生徒の意見しか出てこないと考えられる。

<講師の先生から>

- ・拉致問題をはじめ様々な社会問題について、いろいろ言われるのが怖いからやれないという意見があるが、それではいけない。知識、学習方法等研究していくことが大切。全部の人権課題はできないが、1 年間に 1 つをやる感覚で良いのではないかと。
- ・JF ケネディの言葉の紹介:「あなたの国があなたのために何ができるかを問わないで欲しい。あなたがあなたの国のために何ができるかを問うて欲しい」(フロンティアスピーチ)
- ・幸福享受ではなく、幸福は自分でつくるものという認識

3 アドバイザー 板橋区立中台中学校 中野英水副校長先生「社会科授業づくり」

(1) 地理的分野の授業

- ①学習指導要領解説を活用する。事例も書いてある
- ・「地域」をとらえ、「地域」を考えるのが、地理の学習

・「地域」的特色を捉える（習得）→「地域」の良さや課題が見えてくる（活用）→「地域」的特色を生かして地域の良さを伸ばし、課題を解決してよりよい地域を目指す（探究）

②公民や道徳と区別する

・地理らしさを大切にする（本質的）：地域に着目し、地域の特色や地域の良さ、地域の課題を明らかにしながら、そこにいる人々の営みの努力や工夫を捉えていくもの

社会を空間の広がりでとらえる（空間軸）

③地理的な見方・考え方を働かす

・地理的な見方・考え方を働かすことで、空間的に捉えられる。

④地図を活用する

・位置や分布、地域システム、空間的な広がりや空間的スケールを捉えるために不可欠なアイテム

・ICTを活用しても、地図帳や掛地図は不可欠。何気ないタイミングで見たり、自分から見たりするのは、アナログの良さ（生徒のタイミング）

（2）社会科の授業

①社会科の授業は何を学ぶのか：人々の営みを探究

②社会科の学びを科学する：事象の要因をロジックで追究する

（3）授業づくり

①授業をPDCAで構成する：指導と評価の一体化

②教科書をどのように活用するか

③本文と資料の活用

*なぜ、教科書の本文を読ませて理解させるだけではだめなのか

*資料から考えさせると、将来的に生徒のどんな力が身に付くのか

*リフレクションをすると何が良いのか

（3）主体的に学習に取り組むとは

「生徒エージェンシー」「教師エージェンシー」とは。

4 その他

*教科横断的な課題に取り組む事例が多く見られた。社会科が中心となりカリキュラムマネジメントを積極的に考えていく可能性が示唆された。

*「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、振り返りシートを活用している事例が多く見られた。「主体的な学び」とはどのようなものであるか、教科横断的な課題について考える、「構想」ということを通して、参加者同士で考えを深めていった。

*タブレット端末を活用して、調べ学習、発表という形式は定着してきている。また、単元を貫く課題を設定して、課題解決学習に取り組んでいる実践例が多かった。

*分野のまとめの学習では、価値観を問う学習課題の設定も多く見られた。